

「オネエ所長の調査ファイル」 # 20

山崎浩治

1

「リップペンシルとグロスで仕上げたセクシーなアヒル口！　なのに、どうしてあたしったらこんなに写真写り、悪いのかしら」

「それは写真写りというより、元が悪いんです！　ていうか、病院で自撮りしないで下さい！」

「自撮りスキルを極めたいのよ。もっとキレイになりたいからア」

「いま撮った画像、オレに下さい。待ち受けにします」

「まるで仲良しカップルみたいじゃない！」

「いや、魔除けにいいかなって。所長、沖縄の屋根に飾ってあるやつとソックリですもん」

「あたしをシーサーみたいに言わないで！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透が金沢市内にある病院内の食堂で張り込み中だ。市山はおだんごヘアにショートパンツとアロハシャツという夏真っ盛りの女装をしている。パート主婦江梨子(48歳)から「死の床にいる夫の葬式のこと義父からあれこれ口出しされて困っている」と相談を受け、夫の修一(50歳)が入院する病院を訪れているのだ。

「長男の葬式は実家でやるのが当然やろ！　実家から離れた土地で葬式をやられたら、わしは面目なくて表も歩けん！」

見舞いにやってきた義父・勲(78歳)がつばを飛ばして話している。隣席にさりげなく陣取った市山と透が聞き耳を立てるまでもない大声だった。

「息子は生きてるってのに、なんなんですか、あのクソじじい」

透が眉をひそめて憤慨した。

江梨子は20代の時、前夫の暴力が原因で離婚。2人の子どもを抱え、片町のスナックで働いていた時に長距離トラックのドライバー修一と知り合い、10年前に再婚した。しかし県外に住む勲は「初婚の一人息子が子連れの子バツイチ女と一緒にすることは許せん！」と結婚に大反対し、以来、絶縁状態となっていた。

状況が変化したのは半年前。修一のガンが発覚し、余命宣告されたことを知って「親より先に死ぬのは親不孝。最後の親孝行だと思って、葬式は実家でやれ！」と乗り込んできたのだった。

2

「夫は『実家で葬式をやりたくない』と言っています。実家は旧弊な田舎町で、自分が死んで親戚たちから『祭壇が小さい』『花が少ない』と比べられたくない、って」

数日後、「プライベート・リサーチ」を訪れた江梨子がメンズスーツ姿の市山に相談している。

「ご主人の思いは、義父に伝えたの？」

「ええ。でも実家で葬式を挙げた方が会葬者が増えて、香典も多く入る。その分、盛大な葬式を

挙げられるからと」

勲は地元の町議会議員を長く務めた地元の名士だという。15年ほど前に妻と死別し、現在は離婚して婚家から戻ってきた長女(52歳)と二人暮らしをしている。

「盛大なお葬式ねえ……」

懐疑的につぶやく市山に、江梨子が言葉を継いだ。

「義父は、盛大なお葬式を挙げてやらないと息子が浄土に行けん、と言うんです」

「それじゃ何？ お葬式が盛大でなきゃ浄土に行けないの？ そんなバカな話があるもんですか！」

「口ではあれこれ言ってますが、結局、親戚とか近所の手前、恥ずかしいというのが本音です。葬儀費用も自分が負担する気はないようですし」

うんざりした顔でため息をついた市山が口を開いた。

「一人息子だからって、実家から離れた土地でお葬式を挙げてはいけないなんて法律はないわ。義父からのプレッシャーは強いでしょうけど、ご主人の意志を尊重してあげて」

「分かりました」

それから数週間後、ついに修一が帰らぬ人となった。

3

「結婚したら男は変わる」というのが最初の結婚から得た教訓だ。離婚後、勤めていたスナックで出会った修一は無口で優しい男だったけれど、結婚すればいずれ「裏の顔」が現れるだろうと、心のなかでどこか高をくくっての再婚だった。

でも修一には裏も表もなく、根っからの優しい人だった。結婚と同時になさぬ仲の2人の子どもを養子縁組し、我が子同然に接してくれた。そればかりでなく、「二人の肩身が狭くなるといけないから」と血のつながった子どもも欲しがらなかった。

長距離トラックのドライバーだったので、家に帰ってくるのは1日置き。時には週に一度しか帰ってこない時もある。再婚した時、まだ小学生で難しい年ごろだった大輔と美晴も子煩悩な修一になつき、いつしか「パパ、パパ」と屈託なく呼ぶようになった。

屈強な体だったので、体の異変には無頓着だったのだろう。「背中が痛む」と言い出して、近所の病院で検査してみたところガンが見つかる。紹介された大きな病院で手術したけれど、その時すでに全身にガンが転移していて手の施しようがなかった。なぜもっと早く病院に行かせなかったのか、と江梨子はずっと悔やんでいる。

病室のベッドに横たわる修一は枯れた枝のようになった腕に点滴の針をさし、鼻腔からチューブで酸素吸入を受けている。痛み止めの薬を使い始めたので、最近は意識が朦朧としている時間が長い。

江梨子はベッドの枕元にあるキャビネットから1冊のノートを取り出す。修一が入院当初、元気だったころに記した「エンディングノート」だった。そこには友人の連絡先や保険証書類の保管場所などが記入され、遺影用の写真もはさまれてあった。結婚してすぐ、家族で行楽地に出掛

けた時に撮った写真だ。江梨子と2人の子供に囲まれ、線のように細くなった目で修一が笑っている。

何度読み返したか分からないノートの最後には、こんな言葉が綴られていた。

「大輔と美晴は大学生と高校生で、まだまだ金がかかる。オレの葬式はできるだけ質素にやってくれ」

「子どもたちが一人前になるまで面倒見てやれなくてごめんな。でも、江梨子と会えてオレは幸せだった。いつかあの世でまた会おう。一足先に行ってるから、ゆっくりおいで」

鉛色の顔色で眠っている修一の手を握る。薬が効いているのだろう、穏やかな表情だった。その寝顔に自然と頭が下がる。涙があふれた。「後から行くから絶対待っててね。約束だよ」と声にならない声で江梨子が言った。

4

修一の葬儀は金沢市内のセレモニーホールで、こぢんまりとした家族葬の形で行われた。豪華な祭壇こそなかったものの、家族とごく親しい友人たちでゆっくりと見送りたいという思いが込められた葬儀だった。勲には日時、会場を連絡してあったが、本人はもちろん、親族の誰一人として通夜や葬儀、火葬に姿を見せることはなかった。江梨子が「金沢プライベート・リサーチ」に現れたのは葬儀から数週間後のことである。

「シュウちゃんの遺骨を実家の墓に入れたい、と義父から連絡があったんです」

江梨子によれば、父親と折り合いが悪かった修一は高校卒業後、家出同然に実家を飛び出しており、「いまさら実家の墓には入りたくない」とエンディングノートにも書き残しているという。

「ただ、私がお墓を建てるとなると高額のコストがかかるので……」

江梨子が言い淀む。結婚後に建てた家のローンは修一の死去によって団体信用生命保険から残高が支払われ、完済している。死亡時3000万円の生命保険に加入していたものの、パート勤めの江梨子としては2人の子どもの教育費のためにできるだけ残しておきたいようだった。

「別に無理してお墓を建てなくたっていいじゃない？ 最近は、お骨を埋葬せず、自宅に置いて`手元供養、する人も増えているのよ」

明るい声で言う市山の前で、江梨子が逡巡した。

「実はもう一つ困っていることがあって……」

「義父が他にも何か言ってるの？」

「夫の保険金を半分、寄越せて。親として当然の権利だから、って」

「はああ？ 念のため聞くけど、ご主人の保険金の受取人は義父なの？」

「いえ、私です」

「だったら義父がなんと言おうが、受取人はあなた。びた一文、義父にやる必要なんかないわよ」

市山の言葉に江梨子がほっと息を吐いたが、その表情はすぐれなかった。

「ご主人が亡くなっても、あなたは、長男の嫁、であることに変わりはない。義父はこれからもなんやかんやと、あなたに何か言ってくるかもしれないわね」

5

市山の指摘通り、勲は折に触れて「息子の遺骨を先祖の墓に入れたいから分骨しろ」「長男の嫁として法事に顔を出せ」などと連絡してきた。対応に嫌気がさした江梨子が市山のアドバイスに従い、「姻族関係終了届」を提出したのはそれからほどなくのことだった。

日本では結婚することによって配偶者の父母、兄弟姉妹と姻族(親族)関係が発生する。この関係は離婚すると自動的に消滅するが、配偶者が先立った時、親族関係はそのまま継続される。もし配偶者の死後、相手の親族と法的に関係を絶ちたい場合、「姻族関係終了届」を役所に提出することで親族関係を縁切りできるのだった。

勲はその後、脳梗塞で倒れ、一命は取り留めたものの、体の半分に麻痺が残った。最近では認知症の症状も現れているらしい。「姻族関係終了届」を提出していなければ「長男の嫁」として介護を手伝え、と迫られたことだろう。

「夫の墓を建てたんです」と江梨子から市山に電話があったのは、修一の死から1年後である。修一とともに江梨子の生前戒名を刻んだ夫婦墓だという。

「生前墓とは思いついたことをしたわね」

「ちょっと無理をしたんですが、狭い家の中にいつまでもシュウちゃんを置いておくのは、なんだか可哀想で。それに生きている時は10年しか一緒にいられなかったけど、夫婦墓を作っておけば、死んでからずっと一緒にいられるから。自分が死んだ後の行き先が決まると、なんだかホッとするものですね」

「夫と一緒に墓に入りたくないという奥さんが多いのに、あなたは熱烈にご主人のことを愛してる。羨ましいわ」

「シュウちゃんに会うのを楽しみに、残された人生を頑張らなきゃ」

晴れ晴れしく語った江梨子が電話を切った。

お盆のある日、黒のワンピースで女装した市山と透が修一の墓参りに赴くと、一足先に江梨子が子どもたちとともに真新しい墓の前で手を合わせ、頭を垂れていた。時間をかけ、一心に何かを祈っているようだ。そんな家族の姿を遠くから見守りながら、透が「40代で自分の墓を作るなんて早過ぎないですか」と言葉を漏らす。市山が言った。

「死をきちんと見つめることで、生を全うできるのよ。あたしはね、オネエだから結婚できない。だから、あたしは死ぬ時、ウェディングドレスを着て死に装束にするんだ。人生最後の夢よ」

まぶしそうな眼差しで振り返る透に、市山が続けた。

「次は必ず女に生まれ変わる。そう思えば、死ぬのも怖くないわ。さてと、遺影用の写真でも自撮りしようかな」

市山がスマホを構えてシャッターを押した。